

一

或秋の午頃、僕は東京から遊びに来た大学生のK君と一しよに蜷気楼しんきろうを見に出かけて行った。鵜沼くけぬまの海岸に蜷気楼の見えることは誰でももう知っているであらう。現に僕の家の女中などは逆まに舟の映ったのを見、「この間の新聞に出ていた写真とそっくりですよ。」などと感心していた。

僕等は東家の横を曲り、次手にO君も誘うことにした。不相変赤シャツを着たO君は午飯の支度でもしていたのか、垣越しに見える井戸端にせつせとポンプを動かしていた。僕は秦皮樹とねりこのステッキを挙げ、O君にちよつと合図をした。

「そつちから上つて下さい。——やあ、君も来ていたのか？」

O君は僕がK君と一しよに遊びに来たものと思つたらしかつた。

「僕等は蜷気楼を見に出て来たんだよ。君も一しよに行かないか？」

「蜷気楼か？——」

O君は急に笑ひ出した。

「どうもこの頃は蜷気楼ばやりだな。」

五分ばかりたつた後、僕等はもうO君と一しよに砂の深い路を歩いて行つた。路の左は砂原だった。そこに牛車の轍が二すじ、黒ぐろと斜めに通つていた。僕はこの深い轍に何か圧迫に近いものを感じた。逞しい天才の仕事の痕、——そんな氣も迫つて来ないのではなかつた。

「まだ僕は健全じゃないね。ああ云う車の痕を見てさえ、妙に参つてしまふんだから。」
O君は眉をひそめたまま、何とも僕の言葉に答えなかつた。が、僕の心もちはO君にははつきり通じたらしかつた。

そのうちに僕等は松の間を、——疎らに低い松の間を通り、引地川の岸を歩いて行つた。海は広い砂浜の向うに深い藍色に晴れ渡つていた。が、絵の島は家々や樹木も何か憂鬱に曇つていた。

「新時代ですね？」

K君の言葉は唐突だった。のみならず微笑を含んでいた。新時代？——しかも僕は咄嗟の間にK君の「新時代」を発見した。それは砂止めの笹垣を後ろに海を眺めている男女だった。尤も薄いインバネスに中折帽をかぶつた男は新時代と呼ぶには当らなかつた。しかし女の断髪は勿論、パラソルや踵の低い靴さえ確に新時代に出来上つていた。

「幸福らしいね。」

「君なんぞは羨しい仲間だろう。」

O君はK君をからかったりした。

蜃気楼の見える場所は彼等から一町ほど隔っていた。僕等はいずれも腹這いになり、陽炎の立つた砂浜を川越しに透かして眺めたりした。砂浜の上には青いものが一すじ、リボンほどの幅にゆらめいていた。それはどうしても海の色が陽炎に映っているらしかった。が、その外には砂浜にある船の影も何も見えなかった。

「あれを蜃気楼と云うんですかね？」

K君は顰を砂だらけにしたなり、失望したようにこう言っていた。そこへどこからか鴉が一羽、二三町隔った砂浜の上を、藍色にゆらめいたものの上をかすめ、更に又向うへ舞下った。と同時に鴉の影はその陽炎の帯の上へちらりと逆さに映って行つた。

「これでもきようは上等の部だな。」

僕等はO君の言葉と一しよに砂の上から立ち上った。するといつか僕等の前には僕等の残して来た「新時代」が二人、こちらへ向いて歩いていった。

僕はちよつとびっくりし、僕等の後ろをふり返つた。しかし彼等は不相変一町ほど向うの笹垣を後ろに何か話しているらしかった。僕等は、——殊にO君は拍子抜けのしたように笑い出した。

「この方が反かえつて蜃気楼じゃないか？」

僕等の前にいる「新時代」は勿論彼等とは別人だった。が、女の断髪や男の中折帽をかぶった姿は彼等と殆ほとんどど変らなかつた。

「僕は何だか気味が悪かつた。」

「僕もいつの間に来たのかと思ひましたよ。」

僕等はこんなことを話しながら、今度は引地川ひきしがわの岸に沿わずに低い砂山を越えて行つた。砂山は砂止めの笹垣すすきの裾にやはり低い松を黄ばませていた。O君はそこを通る時に「どっこいしょ」と云うように腰をかがめ、砂の上の何かを拾い上げた。それは瀝青チヤンらしい黒棒の中に横文字を並べた木札だった。

「何だい、それは？ Sr. H. Tsuji …… Unua …… Aprilo …… Jaro …… 1906 ……」

「何かしら？ dua …… Majesta …… ですか？ 1926 としてありますね。」

「これは、ほれ、水葬した死骸しがいについていたんじゃないか？」

O君はこう云う推測を下した。

「だって死骸を水葬する時には帆布か何かに包むだけだろう？」

「だからそれへこの札をつけてさ。——ほれ、ここに釘くぎが打つてある。これはもとは十字じゆう架しかの形をしていたんだな。」

僕等は今その時には別荘らしい篠垣しのがきや松林の間を歩いてゐた。木札はどうもO君の推測に近いものだった。僕は又何か日の光の中に感じる筈はずのない無気味さを感じた。

「縁起でもないものを拾つたな。」

「何、僕はマスコットにするよ。……しかし1906から1926とすると、二十位はたちで死んだんだな。二十位と——」

「男ですかしら？ 女ですかしら？」

「さあね。……しかし兎とに角かくこの人は混血児あいのこだったかも知れないね。」

僕はK君に返事をしながら、船の中に死んで行つた混血児の青年を想像した。彼は僕の想像によれば、日本人の母のある筈はずだった。

「蜃気楼か。」

O君はまっ直すくに前を見たまゝ、急にこう独り語を言つた。それは或は何げなしに言つた言葉かも知れなかった。が、僕の心もちには何か幽かすかに触れるものだった。

「ちよつと紅茶でも飲んで行くゆかな。」

僕等はいつか家の多い本通りの角に佇たたずんでいた。家の多い？ ——しかし砂の乾いた道には殆ど人通りは見えなかった。

「K君はどうするの？」

「僕はどうでも、……………」

そこへ真白い犬が一匹、向うからぼんやり尾を垂れて来た。

二

K君の東京へ帰った後、僕は又O君や妻と一しよに引地川の橋を渡って行つた。今度は午後七時頃、——夕飯をすませたばかりだった。

その晩は星も見えなかった。僕等は余り話もせずに人げのない砂浜を歩いて行つた。砂浜には引地川の川口あたりに火かげが一つ動いていた。それは沖へ漁に行つた船の目じるしになるものらしかった。

浪の音は勿論絶えなかった。が、浪打ち際へ近づくとつれ、だんだん磯臭さも強まり出した。それは海そのものよりも僕等の足もとに打ち上げられた海艸や汐木の匂らしかった。僕はなぜかこの匂を鼻の外にも皮膚の上にも感じた。

僕等は暫く浪打ち際に立ち、浪がしらの仄くのを眺めていた。海はどこを見てもまつ暗だった。僕は彼是十年前、上総の或海岸に滞在していたことを思い出した。同時に又そこに一しよにいた或友だちのことを思い出した。彼は彼自身の勉強の外にも「芋粥」と云う

僕の短篇の校正刷を読んでくれたりした。……

そのうちにいつかO君は浪打ち際にしゃがんだまま、一本のマッチをともしていた。

「何をしているの？」

「何ってことはないけれど、……ちよつとこう火をつけただけでも、いろんなものが見えるでしょう？」

O君は肩越しに僕等を見上げ、半ばは妻に話しかけたりした。成程一本のマッチの火は海松ふさや心太艸の散らかった中にさまざまの貝殻を照らし出していた。O君はその火が消えてしまうと、又新たにマッチを摺り、そろそろ浪打ち際を歩いて行つた。

「やあ、気味が悪いなあ。土左衛門の足かと思つた。」

それは半ば砂に埋まった遊泳靴の片つぽだった。そこには又海艸の中に大きい海綿もころがっていた。しかしその火も消えてしまうと、あたりは前よりも暗くなつてしまった。

「昼間ほどの獲物はなかつた訣だね。」

「獲物？ ああ、あの札か？ あんなものはざらにありはしない。」

僕等は絶え間ない浪の音を後に広い砂浜を引き返すことにした。僕等の足は砂の外にも時々海艸を踏んだりした。

「ここいらにもいろんなものがあるんだろうなあ。」

「もう一度マツチをつけて見ようか？」

「好いよ。……おや、鈴の音がするね。」

僕はちよつと耳を澄ました。それはこの頃の僕に多い錯覚かと思つた為だった。が、實際鈴の音はどこかにしているのに違いなかった。僕はもう一度O君にも聞えるかどうか尋ねようとした。すると二三歩遅れていた妻は笑い声に僕等へ話しかけた。

「あたしの木履ぼつくりの鈴が鳴るでしょう。——」

しかし妻は振り返らずとも、草履ぞうりをはいているのに違いなかった。

「あたしは今夜は子供になつて木履をはいて歩いてゐるんです。」

「奥さんの袂たもとの中で鳴っているんだから、——ああ、Yちゃんのおもちやだよ。鈴のついたセルロイドのおもちやだよ。」

O君もこう言つて笑い出した。そのうちに妻は僕等に迫いつき、三人一列になつて歩いて行つた。僕等は妻の常談じやうだんを機会に前よりも元氣に話し出した。

僕はO君にゆうべの夢を話した。それは或文化住宅の前にトラック自動車の運転手と話をしている夢だった。僕はその夢の中にも確かにこの運転手には会つたことがあると思つていた。が、どこで会つたものかは目の醒さめた後もわからなかった。

「それがふと思ひ出して見ると、三四年前にたつた一度談話筆記に來た婦人記者なんだが

ね。」

「じゃ女の運転手だったの？」

「いや、勿論男なんだよ。顔だけは唯ただその人になっっているんだ。やつぱり一度見たものは頭のどこかに残っているのかな。」

「そうだろうなあ。顔でも印象の強いやつは、………」

「けれども僕はその人の顔に興味も何もなかったんだがね。それだけに反かえって気味が悪いんだ。何だか意識しきの闕くわの外にもいろんなものがあるような気がして、………」

「つまりマツチへ火をつけて見ると、いろんなものが見えるようなものだな。」

僕はこんなことを話しながら、偶然僕等の顔だけはつきり見えるのを発見した。しかし星明りさえ見えないことは前と少しも変らなかった。僕は又何か無気味になり、何度も空を仰いで見たりした。すると妻も気づいたと見え、まだ何とも言わないうちに僕の疑問に返事をした。

「砂のせいですね。そうでしょう？」

妻は両袖りょうそでを合せるようにし、広い砂浜をふり返っていた。

「そうらしいね。」

「砂と云うやつは悪戯いたずらものだな。蜃気楼しんきろうもこいつが拵こしらえるんだから。………奥さんはまだ

蜃気楼を見ないの？」

「いいえ、この間一度、——何だか青いものが見えたばかりですけれども。……」

「それだけです。きよう僕たちの見たのも。」

僕等は引地川^{ひきじがわ}の橋を渡り、東家^{あずまや}の土手の外を歩いて行つた。松は皆いつか起り出した風にこうこうと梢^{しずえ}を鳴らしていた。そこへ背の低い男が一人、足早にこちらへ来るらしかった。僕はふとこの夏見た或錯覚^{さくかく}を思い出した。それはやはりこう云う晩にポプラの枝にかかった紙がヘルメット帽のように見えたのだつた。が、その男は錯覚ではなかつた。のみならず互に近づくのにつれ、ワイシャツの胸なども見えるようになった。

「何だろう、あのネクタイ・ピンは？」

僕は小声にこう言つた後、忽ち^{たちま}ピンだと思つたのは巻煙草^{まきたばこ}の火だつたのを発見した。すると妻は袂^{たもと}を銜^{くわ}え、誰^{たれ}よりも先に忍び笑いをし出した。が、その男はわき目もふらずにさつさと僕等とすれ違つて行つた。

「じゃおやすみなさい。」

「おやすみなさいまし。」

僕等は気軽にO君に別れ、松風の音の中を歩いて行つた。その又松風の音の中には虫の声もかすかにまじつていた。

「おじいさんの金婚式はいつになるんでしょう？」

「おじいさん」と云うのは父のことだった。

「いつになるかな。……東京からバタはとどいているね？」

「バタはまだ。とどいているのはソウセエジだけ。」

そのうちに僕等は門の前へ——半開きになった門の前へ来ていた。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第1巻」小学館

1987（昭和62）年5月1日初版第1刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第八巻」岩波書店

1978（昭和53）年3月22日発行

初出：「婦人公論 第十二年第三号」

1927（昭和2）年3月1日発行

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1999年1月24日公開

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。